
血と林檎

実の白菌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血と林檎

【Zコード】

Z2716F

【作者名】

実の白菌

【あらすじ】

午後の静かな住宅街。その内のひとつのお家で、事件は起つた。

ああ・・・

俺はなんてことしちまつたんだ・・・

そして手にしていたナイフを落とした。

手が震えている・・・

信じたくはなかった

田の前の光景が自分のつくりだしたモノとは

俺は ソレ に触れてみた。

冷たい・・・

そして真っ赤に染まっている。

さつきまで生き活きていたのに・・・

今はその面影すらのこっていない。

一階から誰かが降りてきた。

妹だった。

これは何よりも最悪の状況だった。
妹がリビングへ入ってきた。

「? 何やつてんの・・・お兄ちゃん。」

「え? あ、いや・・・え?」

言葉がでてこなかつた。

妹は俺の後ろにあるモノに気が付いたよつだ。

「？・・・ー?お、お兄ちゃん・・・それ!?

「・・・」

「ひどい・・・」

「ほんの どいめん。
だつてお前のウサギちゃんリングがあまりにも
ブカツコウだから直そつかと思つたら・・・」

床には完全に耳を剥ぎ取られた ソレ がころがつていた。

「んもーう。初めて作つたんだからしょーがないでしょー、
かわいそかわいそ。」

「ひがつたリンク」を抱え上げながらいつ言つた。

「といひでお母さん知らなー?」
これの編み方聞きたかつたんだけど
一

「俺は知らないなあ。出かけてるんじゃない?」

「やつかも、じやあ後でいいや

そう言い残し、妹は一階へ戻つた。

この会話中心臓が何度もちぎれると思つたか・・・。

俺は足でふんずけて隠していたナイフを拾い上げた。そのナイフには大量の血が付着していた。

ソファーの後ろで息もせず横たわっている母の血が。

(後書き)

ありふれた兄の行動の裏の恐ろしい真実。

この作品は僕の「デビュー作となつたわけですが、是非とも感想を聞きたいので

ドシドシどりやー（・・・なんじやこつや）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2716f/>

血と林檎

2011年1月28日09時15分発行